西　陬　余　聞

栃木県教育委員会安足教育事務所長　漆　原　十　月

山口から島根への視察の道すがら萩市へ立ち寄ったのは昨年の晩秋のことである。かねてから一度松下村塾をたずねて吉田松陰の教育精神に触れたいという宿願を果たすためであった。山陰西陬の地，萩の町並は中心部の商店街をのぞけば武家屋敷の遺構をそのままに，その静かなたたずまいは萩湾までつらなり，珍しく凪いだ日本海の水の色はひときわ青さを加えて旅心をなごませてくれた。

しかし，小春日の陽の光に照らし出された松下村塾は百余年の風雪に耐えて，柱もはめ板の木目もあらわに節くれだってみすぼらしくさえ思える小さな切妻の瓦屋であった。私は近よって，そっとはめ板の木目に手のひらをあててみた。それから室内をのぞくと，薄暗がりの畳の上にがんじょうなつくりの座机が一つおいてあるばかりである。この一見そまつな建物の，この空間から明治の新時代建設の偉業に参画した幾多の俊秀逸材が輩出したことを改めて思い起こし，ひとりの卓抜な指導者の薫染感化の力の偉大さに強い感動を覚えたのである。

私はこんど萩市をたずねて見聞したことにより，従来描いていたいわゆる豪猛の気あふれた憂国の志士松陰とは別の人間像を知るに足るいくつかの資料を拾い集めることができた。それは，私にとって吉田寅次郎の人間の発見といえることである。宿の年老いた女中は，今も吉田松陰が在世するように親しみをこめて「松陰先生，松陰先生」と呼んでは，長崎遊学の途次，唖の弟，敏三郎のために深夜神前にぬかづいて祈りをこめたことや，妹千代に対する情愛のこまやかさなどを聞かせてくれた。このような肉身に対する慈愛の心は，塾生吉田栄太郎を弟のように愛し，自分の後継者として絶対の信頼をおき，また少年品川弥次郎にそそいだ人間愛の至情につながる人間松陰の真面目なのであろう。

「二十一回猛士」の号のいわれも松陰の個性がにじみ出ていて興味深いものがある。そのいわれは彼の夢枕に立った神人による呼称であることは，いささか呪詛的な感をまぬかれないがともかく，これを彼なりに解釈して，杉家の杉を分解して十と八と三とし，合わせて二十一，吉田の字を分解すれば士と田の中の十とで二十一，その十のかわりに吉の字の下半を入れて回とし，また，寅（次郎）の寅は虎に属し，虎の徳は猛に通じるとしたところにも，まさに志士をこころざした若き日の烈々たる気迫が如実にうかがい知ることができるのである。

後年，吉田松陰について二人の異国人がペンをとっているが，これも松陰の人間を理解するうえに見のがすことはできない。それは「ペリー日本遠征記」のホークスと，イギリスの文豪ロバート．スチブンソンである。スチブンソンはその著 Yosida-Torajiro の中で「少年時代より詩人でもあった彼は生れながらにして発剌たる，そして聡明なる愛国主義的精神を抱いていた。日本の時勢は彼の大いに関心を寄せるところであり，彼はよりよき未来を計画しつつ祖国の現状に対する認識を発展させる機会を失わなかった。この目的のために彼は足にまかせてすべての英雄に通有な勇敢にして自助的なやり方をもって，その青年時代を絶えず遍歴した。――つまり彼は中世紀を突進しながら１９世紀をめざしてその発見の旅をつづけていったのである。」と述べているが，まことに松陰を的確に理解しているものといえよう。

私は，学制百年の記念すべき年にあたって吉田松陰の人間に触れながら，さらにその教育精神の今日的意味について時間をかけて考えてみたいと思っている。